

【五味】諫山さんは「崩壊と複製」をテーマに制作を続けていて、《Order》のシリーズでは、塩ビパイプを型どって複製した土の円柱が水のなかで崩れていく様子を映像でとらえているということですが、こうした制作手法は、当初どのような着想からスタートしたのでしょうか？

【諫山】幼少期から高校生ぐらいまで絵を描いていたんですけど、僕は絵を描く意味を見出せない、描きたい絵が見つからなかったんです。中学生か高校生ぐらいの時に当時通っていた絵画教室の先生がドナルドジャッドの画集を見せてくれて、アルミの箱というか、そういった作品を観るのですが、これで良いのだという一種の安心感を得て、何か解放されたような気がしたんです。そこから大学（京都造形芸術大学／現京都芸術大学）では、当時先生だった河口龍夫さんに「君は何かの痕跡に興味があるんだね」と言われたのと、ドナルドジャッドのミニマリズムやもの派も調べていきました。河口さんの友達であった榎倉康二さんの話も聞く機会もあってミニマリズムやもの派的な、モノ自体がどうやったら語り始めるか、モノ自体の存在（本質）って何だろうっていうのに興味が出てきて、榎倉康二さんの「シミ」や予兆の概念、野村仁さんの初期の段ボールの作品（自重で自壊する作品）が自分が表現したいことのヒントになるのではないかと思ったのです。そんな中、大学のプロジェクトで演出家の宮本亜門さんが来られ、自分たちのお茶会をつくろうという半年ぐらいの中期プロジェクトに関わることになりました。茶の湯の歴史を調べていくと、茶会が開かれる空間というのは、それぞれの身分というのがフラットになって、一個の何もない人間個人に戻ってコミュニケーションをとる空間であると解釈でき、また茶の湯の歴史を辿っていくと老子に行き着き、「根元に還ることこそ安息なり」という考えに至りました。

「根元に還る」ということが何かと考えていたら、昔見ていた「家なき子」というドラマがあり、そのドラマの中で銃で打たれそうになった人間が「死んだら土に還るだけだ」と言っていた台詞を思い出しました。そして当時バタイユの『エロティシズム』という本を読んでいて、「自分という個体と何か別のものが混ざり合う時、それはその人自身の『死（小さな死）』である」と言われていて、エロティシズムとは意識がなくなって肉体という物質に戻る時なんだと解釈したんです。

そういった経験は自分自身でも体感することがあって、罰ゲームで夜の海に全裸で入ったことがそれで、海というものに飲み込まれる肉体を感じることができました。

こうした経験や考えを巡らせていった時に、先ほど言った宮本亜門さんのプロジェクトでの作品をつくる時に既製品の器を土で複製して、水の中に入れたんです。その水中で土の器が崩れる様を見ていると、個人的に先ほど言った「エロティシズム」を感じたのもあります。それが映像シリーズ全般の制作手法に至った背景だと思います。

---

【五味】今回出品いただいた映像作品のタイトルは《Order#10》ですが、Order という英単語を辞書でひくと、「順序」「秩序」「命令」「注文」「柱の様式」などの意味が紹介されています。タイトルには、どのような意図が込められているのでしょうか？

【諫山】「Order」シリーズのコンポジションが、均等に配置した秩序を持ったストライプ柄として見せているということもあるのと、崩れているものが円柱形であるということから「Order」と名付けました。「柱の様式」とありますが、柱の上下にある梁も含めて「●●式オーダー」と言われており、梁を支える柱も含めての構造様式です。私の映像には梁部分は映っていませんが、柱が垂直に立っていることから、その部分というかそこから秩序を感じてもらえるかも思ったり、。また、駄洒落ではないですが展示する場所に合わせて映像の画角の比率を変えたりと毎回作り変えていることから、今回「#10（10 個目）」となっているようにオーダー制で映像を作っているとも言えます。駄洒落と言いましたが、秩序＝ルールがある柄というのが、ある意味サイズや比率を変えやすい（変えてもストライプはストライプであるとか）という構造を持っているとも言えます。

---

【五味】《Order》のシリーズは、現在までに#11 まで発表されていますが、#1 からどのような経緯や変化を辿ってきたのでしょうか？たとえば柱の本数に決まりなどはありますか？

【諫山】まず本数に決まりはありません。先ほどの回答とも重なるかもしれませんが、展示場所に合わせて本数が多くなったり少なくなっています。#1 は、2019 年のはじめにアンビエントミュージックのイベントで展示しました。アンビエントミュージックが環境に溶け込んだ音楽であり、鑑賞者に音を聞くことを強制しないということでもあったりと、ちょうどその頃に映像も観るということ（始まりと終わりを観なければいけないこと）を強制しない方法に可能性を感じていたこともあったんです。別の映像シリーズで《Objects》シリーズがあるのですが、こちらは 2017 年から始めているシリーズで、

《Order》シリーズと同じように映像の始まりと終わりを限定してはなく、どこから観始めても良い仕様です。ただ、《Objects》は具体的なモチーフのイメージが映っていること且つモニターでの出力を基本としていて、そうではなくよりアンビエントな方法として、ミニマルな柄のようなものが良いと思い、ストライプ柄に見える円柱をモチーフとして《Order》になりました。アンビエントミュージックとの出会いから、《Order》はシリーズとして展開するようになり、展示場所となる環境に合わせて壁一面にプロジェクションする、窓のように見せるなど、より環境を意識した映像として展開していると思っています。（2023年1月14日現在で#11まで制作しています。）

---

【五味】初めて私が諫山さんの作品を見たのは、2021年のBankART KAIKOの個展の時でした。紫色のライトに照らされた広いスペースに、大きな鉢植えの植物がところどころ置かれていて、床には腕とか脚とかの人体のパーツが並んでいる——今まさに呼吸をして生きている植物と、バラバラ死体のような物体。対照的なモノたちが、もともとの意味合いを失って、何のためにあるのかよく分からないまま、ただただそこに置かれている状況に、まず不穏なまでの空気の密度を感じました。

そして壁に投影された映像は、太陽の光とも照明の灯りとも違った不思議な発光に満ちていて、明るいのか暗いのか一瞬わからなくなって、めまいがしました。そこには、何か突き放されたような感覚があるというか、私たちがふだん暮らしている世界とは違う、凍てついた時間が流れているように感じられて、かなり怖かったのを覚えています。

その後2021年から22年にかけて、神奈川芸術劇場KAATの吹き抜けて《Order#8》を展示された時は、うってかわって今度はあまりにも建築の柱やエレベーターなどの周囲の環境になじんでいて、諫山さんの作品が介入していることを思わず忘れそうになるくらい場にマッチしていて驚きました。展示する空間が変わると、諫山さんの中でも作品に対する意識の変化があるのでしょうか？

【諫山】私は自分の作品を一つの要素、装置として考えているため、同じ作品でも展示場所によって印象が変わるといった汎用性が高いものとしてあることが理想です。そのためグループ展だとしたら、個別に観てもらうよりは他の作品の後ろや横にどうしても観えてるといった見え方も面白いと思っています、呼応の仕方にも汎用性を持たせたいというのがあります。

もちろん個展かグループ展か、そしてホワイトキューブであるか否かの違いで意識の差はあるため、同じ映像でも都度展示プランを考え、そして比率やサイズを編集していることからエディションではないその場所のための映像が自然と生まれていることにもつながっています。

---

【五味】 今回の MOMAS コレクションでは、「まるく／まわる」というタイトルのもと、収蔵品の中から「円」や「回転」をテーマにした作品を集めています。出品していただいた《Order#10》は、円柱を使っていて、なおかつ映像がループする円環構造になっているということで、諫山さんからご提案いただいたとおりに展示のテーマにもぴったりだなと思いました。ふつうモノが崩れてしまうと、完全に元の状態には戻りません。人の命ばかり、美術作品ばかりです。しかし《Order#10》には始まりも終わりもなく、モノが崩壊し続けます。そういう賽の河原的な、あるいは誰も死な（/ね）ない近未来的な世界観が、諫山さんの作品の背景にあるのでしょうか？

【諫山】 近未来的な世界観を持っているというよりは、ループしているのは映像の構造上の問題から始まっていて、始まりと終わりが設定されている映像というのを観た時に、個人的にはその作品を手に入れたという感覚に陥って——全てを観終わった時にはそれが一つのモノになる（観終わったコトになる）、作品を掌中してしまうことが何か違うと思ったんです。でも映像がループし続けることでいつまでも手に入れることができない感覚になるというか、作品と観る者が互いに独立してそこに存在しているだけで、対峙している関係になれるというか。

ループを用いた世界観の話をする、BankART KAIKO で行った展示は、ループし続ける映像であったり、昼も夜も関係なく光合成を促す植物育成ライトだったり、身体を永遠に取り替え可能なモノとして示唆するようなマネキンをモチーフにしたパーツだったり、扇風機が回り続けるという環境をつくりました。それは時が進まないような無限の空間のようでありながら（不穏かもしれませんが）、映像の中の円柱が崩れたり、観葉植物の葉っぱが風で揺られていたり、ゆっくり成長していたりと時間の経過を感じられるものも入れ込んでいます。矛盾しているけど、人工物で溢れてる環境に生きている（僕の中ではそれは時が無いような無限空間の中で生きている）中で、モノが朽ちたり、身体が老いていくような刻々と流れる時間の経過を感じて欲しいと思っています。

---

【五味】 今回の「まるく／まわる」の展示は、円環というテーマがそれぞれの作品の間をこだまして広がっていくような、空間全体として 1 つのインスタレーションのようなイメージを実現させたいと思っていました。結果、《Order#10》を含め、このテーマを設定しない限り、ふだんまず並び合うことはないだろうなという作品のコラボが実現しました。

埼玉県立近代美術館の収蔵品の中には、ほかにも円をテーマにした作品がたくさんあるのですが、全体のトーンを意識して出品作品を選んでいきます。

展示作業を進める中で念頭にあったのが、谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』という文章です。電燈に満ちた近代社会が忘れてしまったほの暗い世界を呼び返そうとする試みで、谷崎はテキストの最後で次のように述べています。

私は、われ／＼が既に失いつゝある陰翳の世界を、せめて文学の領域へでも呼び返してみたい。文学という殿堂の檐（のき）を深くし、壁を暗くし、見え過ぎるものを闇に押し込め、無用の室内装飾を剥ぎ取ってみたい。それも軒並みとは云わない、一軒ぐらいそう云う家があってもよかろう。まあどう云う工合になるか、試しに電燈を消してみることだ。

今回の展示は谷崎のこの呼びかけに応じて照明をできるかぎり暗くすることで、明るいところでは聞こえない作品同士のひそやかな囁き合いを耳にできるような空間を目指しました。こうした今回の MOMAS コレクションに参加していただくにあたって、何かお感じになったことはありますか？

【諫山】今回の展示が全体のトーンを意識されているというのが、どれかの作品にスポットをあてることをしている訳ではなかったりと作品間のヒエラルキーがなくフラットにするという効果もあると考えていて、その中で一つ一つの作品を観るというよりは、全体を体験する展示だと思いました。これは、自分が個展をする際に自分の作品を配置する時にも意識しているところでもあり、前の質問での回答で言ったように作品同士が呼応する展示が作品鑑賞として好みです。その背景として、僕が2007年に観たユベール・マルタンがキュレーションした「Artempo」という展示があって、古い宮殿みたいなところが会場で、壁の染みなのか作品なのかわからないようなものがあったり、引率していただいた宮島達男さんも出品していたのですが、少し目線の高い位置に「デジタルカウンター」の作品が星のように見える展示がされていて、ものすごく鑑賞体験として良かったんです。

僕の映像は、ストライプのような柄であったりと見た目には地味？であり、それはニューマンかビュレンか忘れてしまいましたが、ストライプというのは意識を介さないモチーフと言われています。象徴的なものと比べると心のざわつきのようなものが少なく、安寧でもあり、動きを感じないモチーフではないでしょうか。そしてループの構造と映像というあちらの世界が観えてることが悠久の時を感じさせるのではないかと思います。ただ僕の映像ではそのモチーフが崩れるので、意識が呼び覚まされる（現実に戻る）体験につながることになると思います。

---

【五味】今年はどのような作品の制作に取り組む予定ですか？

【諫山】去年の KAAT の展示では、会場にあった円柱が足がかりになって、僕の映像（Order）の円柱との組み合わせで、その場を意識することに繋がったんです。そういった理由から、円柱がある場所での展示をやっていきたいですし（新しい展示プランが新しい作品づくりとも言えます）、2019 年ぐらいから制作しているマネキンをモチーフにした立体作品も継続してプロダクトしていきたいです。